JIJI PRESS 時事通信社
コメントライナー
第8212号　2024年12月9日（月）

歩み寄りと対話を大切に

言の葉OFFICEかのん代表　川邊　暁美

流行語大賞や世相を表す漢字など、2024年をさまざまな視点で総括する時期を迎えた。筆者が住む兵庫県では、前知事失職に伴う知事選が終わり、再選された斎藤元彦知事による新たな県政がスタートしたところだ。当選を目的としないと明言する候補も含め、過去最多7人が立候補し、真偽のほどが分からない情報がネットで大量に拡散されたり、街頭演説の妨害行為が頻発したりするなど、異例ずくめの選挙戦だった。「何を信じて投票したらよいのか分からない」という声を周囲から多く聞き、筆者も大いに困惑した。

◆パワハラ疑惑に揺れた1年

知事のパワハラなどを告発する文書問題に端を発して混乱した1年を振り返ると、兵庫県の今年を象徴する言葉は、まずは「公益通報」「百条委員会」になろうか。「知事の資質」を問うとされた選挙期間中には、「既得権益」（既存組織から支持を得た候補への批判として）という言葉も拡散され、選挙後は「既存メディアVSネットメディア」の戦いであったともいわれる。

「公職選挙法」を巡る問題など荒れた選挙戦の残り火はまだくすぶっているが、ともあれ、多くの県民が県政を前に進めていくことを期待している。再選後初の県議会で斎藤知事は「丁寧な対話と謙虚な姿勢で県政運営に臨む」と決意を述べた。告発文書問題についても「説明責任を果たす」と誠実に対応していく姿勢を示し、公益通報窓口の整備やハラスメントのない組織づくりに早期に取り組んでいくということだ。

◆自分と相手の価値観のズレ

ハラスメントといえば、「ユーキャン新語・流行語大賞」の年間大賞には、「ふてほど」（TBS系ドラマ「不適切にもほどがある！」の略）が選ばれた。これは令和へタイムスリップした”昭和のおじさん“が自分の「当たり前」の言動がコンプライアンス意識の高い現代では「不適切」になることに戸惑いながら奮闘するコメディータッチのドラマだった。

実は、そうした自分と相手との価値観、感覚のズレがパワハラを生む要因の一つでもある。昭和・平成・令和と三時代にわたって仕事をしていると（筆者もである）、「厳しく指導されたおかげで今の自分がある」「若い頃は上司の誘いを断るなんてあり得なかった」など、自分の受けた指導や上司との関係、当時の人権意識が根底にあり、頭では時代に合わせてアップデートしてきたつもりでも、ふと時代錯誤の価値観が顔を出すことがあるから要注意だ。

そして、権限のあるポストにいると、何気ない一言が相手に厳しい叱責と受け取られたり、視線や表情、態度で威圧的と思われたりすることもある。

◆指示する際に気を付けたいこと

部下に指示をする際には、呼びつけず、「自分が相手の近くに行く」「同じ目線で話せるように座る」だけでも心理的な距離が縮まる。そして、「情報（指示内容）」「仕事の意味」プラス「感情」で伝えることだ。「このデータを分析して月末までにまとめてほしい」とまず指示内容を伝え、「これはプロジェクトを進める上での試金石となる」とその意味を説明する。最後に「いつも丁寧に仕事を進める君に頼みたい。分からないことがあったらいつでも相談してほしい」と感情を込め、信頼と期待、協力のメッセージを加える。ささいな感情の行き違いが大問題に発展することのないように、権限のあるポストにいる人こそ、歩み寄りと対話を大切にしてほしい。

（かわべ・あけみ）

◆監修◆ 内外情勢調査会　◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8　TEL：03-6800-1111（代表）
この記事に関する問い合わせは、時事総研（03-3546-2384）まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003